

中一国語

坊っちゃん 第一回

講師・・羽場雅希

◆今日の授業で学ぶこと

・坊っちゃん

◆ 基本情報

・ 著者：なつめそうせき夏目漱石
(1867
〜
1916)

東京大学英文学科卒業後、教師を経て
イギリスに留学。

「わがはい吾輩は猫ねこである」

「こころこころ」などで有名。



・ 時代：明治時代

1906年（明治39年）に
「ホトトギス」という雑誌で発表。

◆ 登場人物

- ・ へ 俺おれ（坊ぼっちゃん） 〓 主人公。親譲ゆずりの無鉄砲てっぽう。
- ・ へ 兄 〓 主人公と仲が悪く、よくけんかをしていった。

・ 父

・ 母

- ・ へ 清きよ 〓 主人公の家の奉公人ほうこうにん。主人公を大変かわいがった。

※奉公人Ⅱ他人の家に雇やとわれて、家事や家業に従事する者。召使めしい。

◆ 場面

- ・ 第一場面：子供時代の無鉄砲な「俺」の悪行。
- ・ 第二場面：母が死んでからの「俺」と父、兄と、清の関係。

- ・ 第三場面：「俺」と清の関係。

- ・ 第四場面：父の死によって家を売る。一家離散りさん。

- ・ 第五場面：兄に金をもらい、物理学校で学ぶ。

- ・ 第六場面：遠い四国の中学への赴任ふが決まり、清と別れる。



小説読解をするときは

- ・登場人物を把握はあくしよう。
- ・それぞれの人物の「性格」と「心情（気持ち）」を読み取ろう。

※ちなみに心情は、ほぼ必ず変化する。

親譲りの無鉄砲で、小どもの時から損ばかりしている。小学校にいる時分、^①学校の二階から飛び降りて、一週間ほど腰を抜かしたことがある。なぜそんなむやみをしたと、きく人があるかもしれない。別段深い理由でもない。新築の二階から首を出していたら、同級生の一人が冗談に、いくらいばっても、そこから飛び降りる事はできまい、弱虫やあい。とはやしたからである。人におぶさつて帰ってきた時、おやじが大きな目をして、二階ぐらいから飛び降りて腰を抜かすやつがあるか、と言ったから、この次は抜かさずに飛んでみせますと答えた。

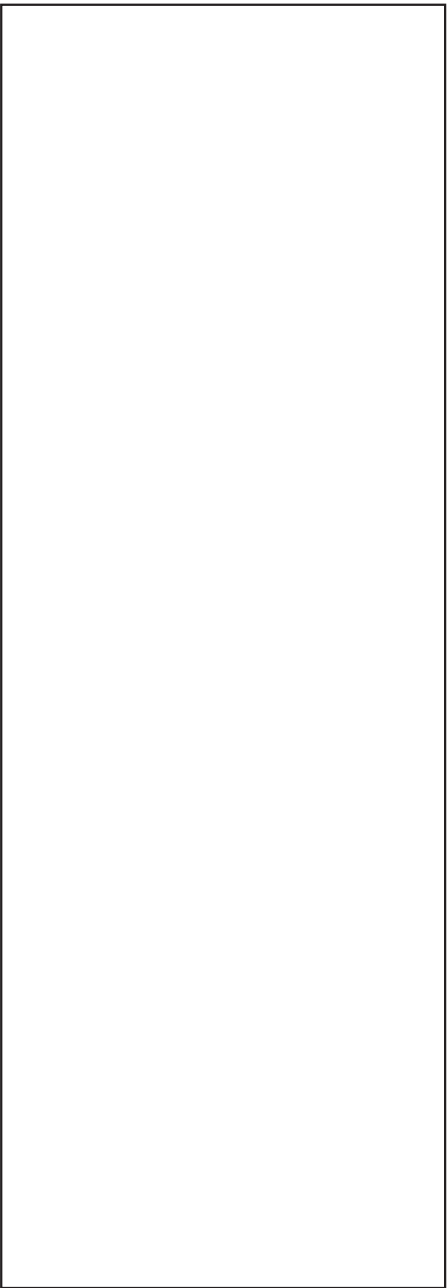
(中略)

おやじは、ちっとも俺をかわいがってくれなかった。母は、兄ばかりひいきにしていた。この兄は、やけに色が白くって、芝居のまねをして女形になるのが好きだった。俺を見るたびに、こいつはどうせろくな者にはならないと、おやじが言った。乱暴で乱暴で行く先が案じられると母が言った。なるほどろくな者にはならない。ご覧のとおりの始末である。行く先が案じられたのも無理はない。ただ懲役に行かないで生きているばかりである。

母が病気で死ぬ二、三日前、台所で宙返りをして、へつついの角であればら骨を打って大いに痛かった。母がたいそう怒って、お前のような者の顔は見たくないと言うから、親類へ泊まりに行っていた。すると、とうとう死んだという知らせが来た。そう早く死ぬとは思わなかった。そんな大病なら、もう少しおとなしくすればよかったと思つて帰つて来た。そうしたら例の兄が、俺を親不孝だ、俺のために、おっかさんが早く死んだんだと言つた。くやしかったから、兄の横つつらを張つて大変叱られた。

【練習問題】

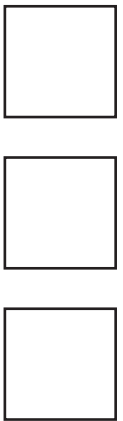
「俺」が、——①のような行動をとったのはなぜですか。文章中の言葉を使って具体的に書きなさい。



負けず嫌いきらいで短気。 ←

後先考えずに行動する人物であることが分かる。

=



① 親譲りの無鉄砲で、小どもの時から損ばかりしている。小学校にいる時分、学校の二階から飛び降りて、一週間ほど腰を抜かしたことがある。なぜそんなむやみをしたと、きく人があるかもしれぬ。別段深い理由でもない。新築の二階から首を出していたら、同級生の一人が冗談に、いくらいばっても、そこから飛び降りる事はできない。弱虫やあい。とはやしたからである。人におぶさつて帰ってきた時、おやじが大きな目をして、二階ぐらいから飛び降りて腰を抜かすやつがあるか、と言ったから、この次は抜かさずに飛んでみせますと答えた。

(中略)

② おやじは、ちつとも俺をかわいがってくれなかった。母は、兄ばかりひいきにしていた。①この兄は、やけに色が白くって、芝居のまねをして女形になるのが好きだった。俺を見るたびに、こいつはどうせろくな者にはならないと、おやじが言った。乱暴で乱暴で行く先が案じられると母が言った。なるほどろくな者にはならない。ご覧のとおり始末である。行く先が案じられたのも無理はない。ただ懲役に行かないで生きているばかりである。

(中略)

③ 母が死んでからは、親父と兄と三人で暮らしていた。おやじはなんにもせぬ男で、人の顔さえ見れば、きさまはだめだだめだと口癖のように言っていた。何がだめなんだか今にわからない。妙なおやじがあつたものだ。兄は、実業家になるとか言つて、しきりに英語を勉強していた。元来、はつきりしない性分で、ずるいから、仲がよくなかった。十日に一ぺんぐらいの割でけんかをしていた。ある時将棋を指したら、ひきょうな待ち駒をして、人が困るとうれしそうに冷やかした。あんまり腹が立ったから、手にあつた飛車を眉間へたたきつけてやった。眉間が割れて、少々血が出た。兄がおやじに言いつけた。おやじがおれを勘当すると言出した。

その時はもうしかたがないと観念して、先方の言う通り勘当されるつもりでいたら、十年来召し使っている清という女が、泣きながらおやじに謝って、ようやくおやじの怒りが解けた。それにもかかわらず、あまりおやじを怖いとは思わなかった。かえって、この清という女に気の毒であった。この女は、もと由緒のある者だったそうだが、瓦解のときに零落して、つい奉公までするようになったのだと聞いている。だから、ばあさんである。このばあさんが、どういふ因縁か、俺を非常にかわいがってくれた。不思議なものである。俺も死ぬ二日前にあいそをつかした——おやじも年じゅうもてあましている——町内では乱暴者の悪太郎とつまはじきをする——この俺を、むやみに珍重してくれた。俺はとうてい人に好かれるたちでない諦めていたから、他人から木の端のように取り扱われるのはなんとも思わない、かえってこの清のようにちやほやしてくれるのを不審に考えた。清はときどき、台所で人のいないときに「あなたは、まっすぐでよいご気性だ。」と褒めることがときどきあった。しかし、俺には清の言う意味がわからなかった。いい気性なら、清以外の者も、もう少しよくしてくれるだろうと思つた。清がこんなことを言うたびに、俺はお世辞は嫌いだと答えるのが常であった。するとばあさんは、それだからいいご気性ですと言つては、うれしそうに俺の顔を眺めている。自分の力で俺を製造して誇つてるように見える。少々気味が悪かった。

「坊っちゃん」

※句読点や符号も一字と数えます。

【第四問】

「俺」の性格を説明したものとして、次の各選択肢は適切か。適切なら○、不適切なら×を書きなさい。

ア、負けず嫌いで、まっすぐな人物。

イ、神経質で、人からの評価を気に病む人物。

ウ、短気で、後先考えずに行動する人物。

エ、ばか正直で、融通のきかないところがある。

オ、プライドが高く、自分の欠点を決して認めない。

カ、非難されても疎まれても、落胆せずにあっさりしている。

ア↓	イ↓	ウ↓
エ↓	オ↓	カ↓